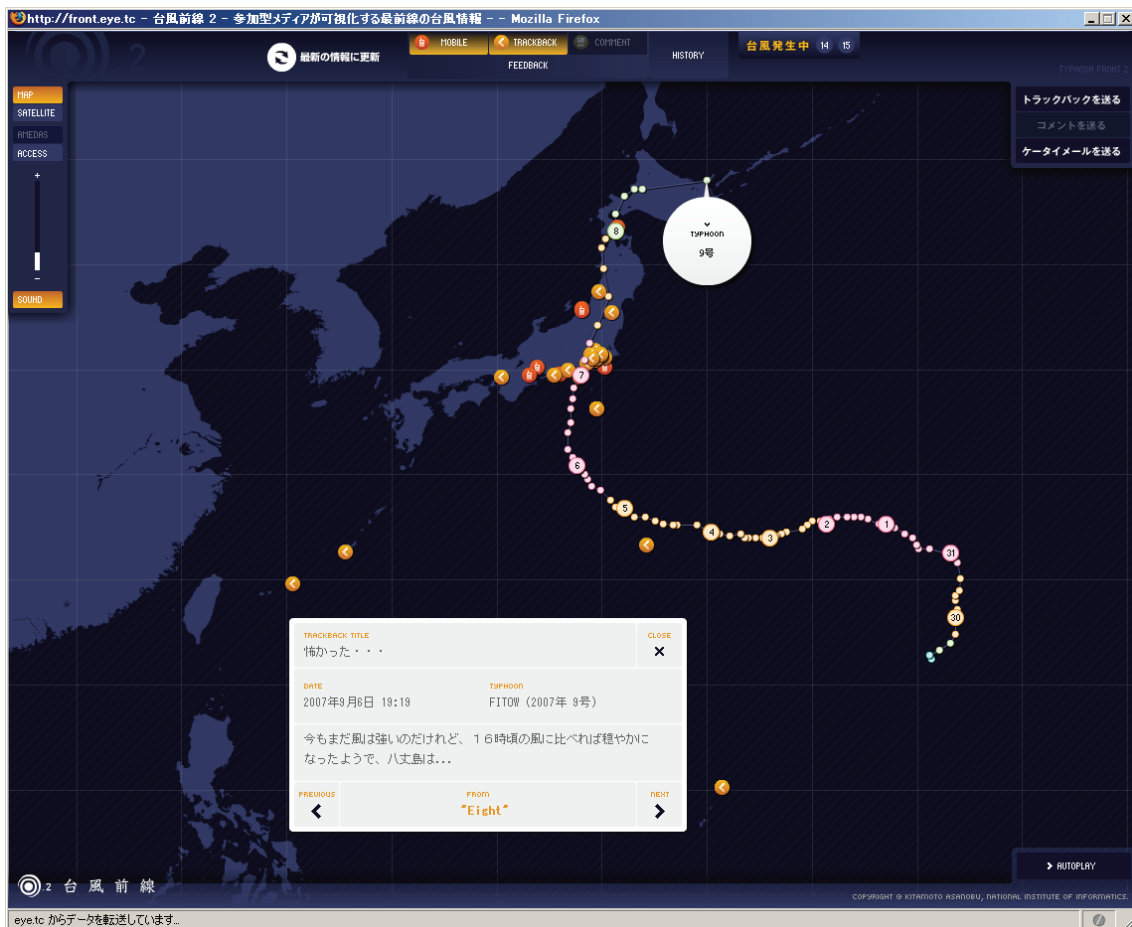


台風前線・参考資料



台風が接近してくると、テレビなどのマスメディアは、台風報道で埋め尽くされることになります。

台風は中心気圧 950 ヘクトパスカルに発達しました。
下田港では岸壁で大波が砕け、横殴りの雨が続いています。
首都圏ではJRと私鉄各線が運転をとりやめています。

こうした客観的な情報は確かに有用ですが、それだけで十分なのでしょうか？台風を迎える各地の状況と、そこに住む人々の存在とを、実感することができるのでしょうか？

各地で慌しく始まる台風への備え、刻々と強まる暴風域での激しい風雨。現地から発信される生の声を集めることにより、もっとリアルな台風の状況と、それを見つめる人々の姿とを、遠く離れた人々にも伝えることができるのではないのでしょうか？

1. 「台風前線」が表現したいもの

台風情報とアート。一体、両者に何の関係があるのかと思われるかもしれません。というのも、一般的に台風情報という言葉で思い出されるのは、以下のような無味乾燥なデータの羅列だからです。

大型で非常に強い台風第xx号は、◎◎日▲▲時には屋久島の南約180キロの北緯28度50分、東経130度25分にあって、1時間におよそ15キロの速さで北北西へ進んでいます。中心の気圧は935ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は45メートル、最大瞬間風速は60メートルで、中心の東側300キロ以内と西側260キロ以内では風速25メートル以上の暴風となっています。

(気象庁ウェブサイトより)

しかし果たして台風情報とは、このような「無味乾燥なデータ」だけで十分なものなのでしょうか。

台風は地球上を移動する巨大な嵐であり、その影響は多くの人々に及びます。楽しみにしていた旅行が中止になった、一日中台風情報に見入ってしまって仕事が手につかなかった、などという軽微な(?)影響もあれば、瓦が飛んで自宅が壊れた、田畑の作物が収穫できなくなった、などという深刻な影響もあるでしょう。

私は従来の無味乾燥な台風情報とは異なる新しい視点として、台風によって影響を受ける人々に焦点を合わせようと考えました。そうした人々が最前線から発する「生の」声を集めることによって、より実感のこもった台風情報を伝えたいと考えたのです。

そのために、インターネットのブログやケータイから情報を投稿すると、台風ごと・地域ごとに情報を集約できるシステムを開発しました。次に、一般の人々から投稿された情報を台風の動きと同期させ、アニメーションとして見せるインタフェースを構築しました。そこから生まれたのは、人々が発信する情報を集めた台風情報という新しい視点でした。

例えば、毎年のように日本を縦断する台風があります。マスメディアではそれを、荒れ狂う自然の猛威とするか、日常生活を乱す厄介者とする視点で伝えますが、それはあくまで一面に過ぎません。別の視点から眺めれば、台風とは日本に住む1億人以上の人々を否応なく当事者として巻き込み、人々の活発な情報発信や非日常行動を巻き起こす存在でもあるのです。こうした「1億人を巻き込む大イベント」において、どこで何が起きているかを把握し、整理し、適切な情報を各個人が入手できるようにするためには、情報の表現に対する新しい方法が必要です。そこに台風情報とアートとの関わりが生じます。

台風という気象現象そのものを表現するだけでなく、台風をきっかけとして激しく発生する情報が、世界を渦巻いて流れるさまを表現すること。これをウェブサイトにおいて実現したのが「台風前線」です。

2. 「台風前線」から見えてきたもの

「台風前線」から見えてきたのは、人々が情報を投稿するタイミングと台風の動きとの関連性です。人々が情報を投稿するタイミングはいくつかあります。台風が発生したとき、台風が日本に接近する見通しが強まったとき、台風が上陸して暴風雨に巻き込まれているとき、台風が去って日常が戻ってきたとき。こうしたタイミングで実際に投稿されてきた情報を、台風の動きと同期させてアニメーションにしてみると、両者が見事に関連していることが一目瞭然となりました。これは台風と人々の関わりを強く感じさせる、これまでに見たことのないシーンでした。

試しに「台風への眼」(URL は後述)というウェブサイトを覗いてみましょう。このウェブサイトは「台風前線」と全く同じ情報を提供していますが、そこから読み取れる情報の性質は大きく異なります。アニメーションという表現なしに、地理的・時間的に推移するパターンを頭の中で想像することは不可能です。地球規模の嵐とそれを迎える人々との関連性のパターンは、「台風前線」という表現によって初めて明瞭になったものです。

また投稿された情報の内容も、各地の台風事情を伝える「生の言葉」として、従来のマスメディアにはない実感のこもった言葉でした。こうした言葉は、台風のインパクトを実感させるという意味では、マスメディアによる客観的な言葉よりも大きな力を備えています。

3. ウェブによって実現した新しいメディア

「台風前線」はウェブの存在によって実現した新しいタイプの「メディア」です。ウェブ上に誰でもブログを開設でき、誰でもケータイでウェブが見られる環境が実現したことで、世界各地からのリアルタイムの情報の集約がウェブというプラットフォームでスムーズに進むようになりました。一方、集まってきた情報を整理して伝えることも、ウェブというプラットフォームを使えば簡単です。

このように、ウェブというプラットフォームを最大限に活用することによって、マスメディアの代替（オルターナティブ）としての新しい「メディア」を生み出すことが「台風前線」の役割です。「メディア・アート」の作品として単体で存在するというよりは、「(マスメディア)をバージョンアップするという役割を担った新しいメディアとして、「台風前線」は存在しています。その最終的な目標は、台風という地球規模の嵐の最新状況を刻々と捉えて人々へ提供する、地球規模の「リアルタイム・メディア」の構築にあります。

4. サイエンスとアートとの関わり

「台風前線」は、より大きな構想である「デジタル台風」プロジェクトの一部として位置

づけられるものです。「台風前線」の着想と存在意義が、このようなより大きな構想に支えられているという点が、「台風前線」をさらにユニークな存在としています。

「デジタル台風」とは台風に関するあらゆるデータを網羅的に収集することを目指したプロジェクトです。これまでに収集したデータは、27年分の台風画像データ(145,000件)、57年分の台風経路データ、31年分のアメダスデータなど膨大な量に達します。こうした巨大なサイエンスデータの整備を進めた結果、「デジタル台風」は台風に関するデータベースとしては世界最大規模のものとなりました。そして充実した公開データベースは、「デジタル台風」ウェブサイトをも日本で最も著名な台風情報ウェブサイトの一つに成長させました。ウェブサイトの累計ページビューは6000万件近くに達しており、多くの人に日常的に利用されるサービスとなっています。「台風前線」というウェブサイトの信用は、その背後に控える「デジタル台風」というサイエンスデータベースに担保されていると言ってもよいでしょう。

こうしたサイエンスデータは有用であるにもかかわらず、関心のない人々にとっては無味乾燥なデータに見えてしまう面があります。サイエンスデータをどのように一般の人々に見せればわかってもらえるのか。こうした問題意識は昔から存在していました。こうした問題意識に対して、アートの力が有効な領域として以下の2点に注目しています。

まず、データを美しく効果的に見せるためにはアートの力が必要です。実際に「台風前線」は表現に工夫を凝らすことによって、単にデータの羅列を眺めているだけでは見えてこなかったパターンを浮かびあがらせることができました。データの山に隠れているパターンを見出すためには、アートの力を借りた表現方法の追究が有効であると考えています。

次に、一般の人々の参加を呼びかけるインタラクティブな活動を促進するためにもアートの力が必要です。こうした参加型のメディアにおいては、「あ、何か面白そう」と人々を惹きつけるところがなければ、一般の人々の参加は期待できません。ゆえに参加型メディアの発展には、アートの力を借りた魅力的なインタフェースの提供が不可欠です。

「台風前線」は単にサイエンスのデータを提供するというところから一歩進め、アートの力を借りて、データの意味することを美しく、楽しく、魅力的に伝えることを目標としています。そしてこうした表現方法の追究を、客観的データを提供する巨大サイエンスデータベースが支えていく。「台風前線」は、サイエンスとアートの良いところをうまく取り込むことによって、さらに広く使われるシステムに発展させていきたいと考えています。

5. 表現上の工夫・システム構成

「台風前線」では、台風に関する多種多様な情報を1枚の地図上にまとめて表示します。そのため表現をできるだけシンプルにすることを心がけました。地図はその上に重ねる台風情報の邪魔にならないように必要最小限の簡素なデザインとし、種々のボタン類も不要なときはできるだけ非表示としています。地図上に情報を表示するという作品は世の中に

多数ありますが、「台風前線」では地図をほぼ海岸線のみの情報にまでそぎ落とすことにより、台風情報を見やすくする手法を用いました。地図以外についても最重要ではない情報を極力そぎ落とすことに留意しています。

現行システムは数台のサーバから構成されています。ウェブサーバの他にも、データベースサーバやメールサーバなどがこのシステムのために稼動しています。また「台風前線」は Adobe Flash を利用した作品ですが、サーバとの通信を随時実行しながら最新のデータを表示するとともに、過去の台風も閲覧できるようにすることで、現在を未来に残すアーカイブとしても機能するという設計になっています。

6. サイト名「台風前線」について

気象学には「台風前線」という言葉はありません。気象学的には前線とは暖かい空気と冷たい空気が接する境界を指す言葉ですが、台風はそもそも暖かい空気のみで成り立っているため前線に相当する部分は存在しません。サイト名の「前線」は「第一線」という比喩的な意味（例えば桜前線と同じ）になります。

7. 「台風前線」関連ヒストリー

2003 年 7 月 「デジタル台風」本格オープン
2004 年 6 月 「台風への眼」オープン（参加型メディアの開始）
2006 年 7 月 「台風前線 1」オープン（最初のバージョン）
2007 年 9 月 「台風前線 2」オープン（二番目のバージョン）

8. ウェブサイト URL

台風前線 2	http://front.eye.tc/
デジタル台風	http://www.digital-typhoon.org/
台風前線 1	http://front.eye.tc/archives/1.0/
台風への眼	http://eye.tc/
台風への眼 / ケータイ	http://kt.eye.tc/

執筆：北本 朝展（2007 年 10 月）